

さ さ き
佐 々 木

まもる
衛

学位の種類 博士(文学)
学位記番号 文 第 107 号
学位授与年月日 平成7年3月23日
学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当

学位論文題目 中国民衆の社会と秩序

論文審査委員 (主査)

教授 杉 山 晃 一 教授 寺 田 隆 信
教授 安 田 二 郎

論 文 内 容 の 要 旨

目次

まえがき

I 中国の社会構造と社会変動

第1章 日本の村と中国の村……比較社会論の試み

- 1 はじめに……日中比較社会論の問題点
- 2 日本の社会関係の構造モデル
- 3 中国の社会関係の構造モデル
- 4 まとめ

第2章 現代化と社会変動の論理

- 1 はじめに……歴史学と社会人類学
- 2 中国「近代化」に対する社会人類学の解釈枠組み
- 3 革命前の中国社会の「構造」……試論
- 4 現代化のなかの中国社会
- 5 まとめ……「構造」の継承と変容

II 家族と親族の構造

第3章 親族集団の分化と統合

- 1 はじめに
- 2 山東省平原県蘇集郷前楨子李庄の事例
- 3 北京市房山区元武屯、田姓の事例
- 4 親族構造の特色

第4章 商家の経営と家族構造

- 1 はじめに
- 2 『金翼』にみられる家族経営の可能性と限界
- 3 「瑞蚨祥」の経営と家族構造
- 4 天津市静海独流鎮の事例
- 5 まとめ……中国商家の発展と脆弱性

III 宗教と娯楽の集団構造

第5章 民間宗教集団の構造的特性

- 1 はじめに
- 2 天理教の活動と組織形態
- 3 宗教集団の活動の二類型
- 4 民間宗教集団の三つの位相
- 5 まとめ

第6章 村の宗教活動と担い手

- 1 問題の所在
- 2 民間宗教の類型論
- 3 山東省平原県蘇集郷前楨子李庄の事例
- 4 北京市房山地区紫草塢郷肖庄の事例
- 5 中国の民間宗教に関する問題提起

第7章 村の演劇集団の組織と活動

- 1 はじめに……村落の演劇
- 2 『中国農村慣行調査』の事例
- 3 『近代中国の社会と民衆文化』（佐々木衛編）の事例
- 4 まとめ……演劇集団の活動にみられる華北村落の構造

IV 社会の構造と秩序

第8章 社会集団の結社的性格について

- 1 問題の所在
- 2 事件の概要と課題
- 3 魯西南・単県の社会的特徴
- 4 「焼餅劉庄」の概況

5 劉士端と大刀会

6 曹楼と曹得礼

7 概括と結論

第9章 社会秩序と復讐

1 問題提起

2 問題提起にかかわる論点

3 義和団運動の事例による論点の分析

4 まとめ

要 旨

本研究は、中国華北地域の村落社会の社会（文化）人類学的調査にもとづいた中国社会の基層構造と社会変動にかんする研究である。調査の領域は、村の政治、家族と親族の構造、年中行事、民間信仰、武術集団、女性の生活など、村の社会生活の全般におよんだ。中国の近代化の一つの側面を、人々の生きた体験のなかに具体的に明らかにすることができた。1986年以來の資料は、『近代中国の社会と民衆文化……日中共同研究・華北農村社会調査資料集』（佐々木衛編、東方書店、1992年）として公刊した。

本研究の特徴は次の二点にある。第一は、中国社会の構造を動的にとらえようと試みたことにある。中国社会の多様性とダイナミクスは、「分化と統合」というアンビバレントな構造にあると考える。「分化と統合」の構造的特徴を、家族と親族、村落の社会生活、宗教や娯楽の社会集団のなかに実証的に論証することをめざした。第二は、「現代化」のなかで、伝統的な基層構造が人々のエネルギーをくみ出し、方向を与える論理を明らかにしようとした。これらは現代中国社会の新しい展開にみられるダイナミックな変動を解釈する一つの論点を提示することができると思われる。

本研究の構成は四部からなり、第一部は中国の社会構造と社会変動の研究で、近代中国社会の構造と変動にかんするモデルを提示した。第二部は家族と親族の構造、第三部は宗教と娯楽の集団構造、第四部は社会の構造と秩序の研究からなり、いずれも第一部で提示したモデルの検証を試みている。

I 中国の社会構造と社会変動

第一章 日本の村と中国の村……比較社会論の試み

日本人研究者による中国社会の研究は、暗黙のうちに日本社会を比較対照して論じている。この場合、イエ、イエ連合、オヤコの関係を日本社会の典型的な構造としている。しかし、日本のイエの系譜的構造や温情主義を静態的に強調しすぎているため、これと対比される中国社会の結合的な構造とダイナミックな論理が見えてこなかった。日本と中国の社会構造を比較的に論じるためには、まず日本社会の構造モデルの再検討が必要とならざるをえない。

有賀喜左衛門は、同族団と組を日本の聚落社会を構成する社会関係の二類型としている。二類型は連続しており相互に転換するばかりか、聚落の生活組織として有機的に結びついている。こうした集団構造の背後に、共同祈願、一味同心として衆人の力を集めることの心強さはむろん、理非の境界を越えた正当性、「一同の観念」をもっている。日々の生活で結ばれる関係を持続的な集団の形態に固定し、集団の統一性を大切なものと感じる集団意識が貫かれているにちがいない。

日本の集団構造と比較して、中国社会の構造的な特質を列举すれば次のようになる。第一に、社会関係が本質的に個人対個人の絆のなかに構成されている。行動の準拠と規範は個人間関係のなかに存在する。第二に、関係は個人的な絆から構成され、集団は個人的な関係の輻輳したネットワークのなかにあらわれる。第三に、集団が社会的勢力を誇り、凝集力を持続させるのは、集団の中心にいる人物の社会的な実力のいかんによる。第四に、集団の構造のなかに、対立と連帯、分節化と統合という、相反するベクトルを同時に内在させている。

以上のように、中国社会の構造は、集団が本質的に個人的な性格を持つところに特徴がある。集団の正当性は、集団を掌握する人物の実力にある。集団の分化による統合という逆説的な構造に、中国社会のダイナミクスが存在するのではないかと考える。

第二章 現代化と社会変動の論理

社会人類学によって解釈される「構造」が、横断面的で非時間的な特徴をもち、また暫定的なものにすぎないとしても、解釈の関心と次元を明示すれば、社会変動を測定する尺度として用いることが可能である。本章では、中国の近代化を担う精神的な原動力を明らかにする目的で、変動をとらえる概念的なモデルを構想した。

仮説的なモデルを用いて現代化のすがたを整理すると次のようになる。

(一)家族と親族の構造：均分相続が貫徹しているので、息子たちは結婚と同時に新しい家庭をつくりできるだけ早く独立をする。しかし、公德と公的な規律の観念が十分でない状況では、親族集団の凝集力への期待は高い。父系大家族という外形形式は変化したが、その内在的な論理はいぜんとして存在している。父系親族に代わって姻戚関係が重要な役割をもつようになったといわれている。村の外との関係が重要になっている今日では、姻戚関係のネットワークは、親族の絆より適合性を高めている。

郷鎮企業の経営には、党組織と有能なリーダーの存在、「承包」とよばれる請け負い制、成員間の平等主義、成員外への差別など、伝統的な家族経営や親族の合資経営の特徴と相似する形態をもっている。家族による経営の構造と論理が郷鎮企業の経営のなかに引き継がれ、「中国的経営」とみなされる新しい形態を生んでいる。

(二)社会生活の構造：「門路」、「拉関係」、「圈子」などとよばれる人的関係は社会関係の中で重要な機能を果たす。私的に結ばれる関係が制度のなかに持ちこまれ、制度を機能させる起動力となっている事情は変わらない。個人的属性を基調とする社会構造は、いうまでもなく「差序格局」（費

孝通)の構造と論理をもつ。

(三)秩序と規範の構造：村や家族の経営にとって、実情をよく知り、理財に明るく、私的な紐帯を広げ枢要な部門に顔が利く、しかも誠実で頼りになる、こういう人物が重要な役割を果たすことに変わりはない。制度が機能するには彼らの存在が欠かせないという、制度と秩序のなかの個人主義的特徴は弱まっていない。

II 家族と親族の構造

第三章 親族集団の分化と統合

中国の親族構造の構成原理の解釈には、集団の統合・連帯の契機を強調する論者と、分散・分裂の契機を強調する論者とがある。しかし、エリートを生んだリニージの分節の分化は親族集団の統合を弱めないばかりか、新しい凝集力を生み出し、一族全体の統合を高めている。分化と統合とがパラドキシカルに統合されているのではないかと考える。本章では、分節化による統合というダイナミックな構造を、華北地域の事例から検証するものである。

華北地域では、共有地、家廟、家譜を1組として備えた親族集団はまれにしか見ることができない。祖先祭祀は近親の祖先を祭祀する集団に分化し、「入り子」式の構造をもつ傾向にある。祖父母や親を祭祀する集団への帰属をつうじて、親族の全体のまとまりを体験しているといえよう。また、いくらかでも社会的な勢力を誇るようになると、家廟を建設し、共有地を経営し、そして家譜を継承する。貧しい地区においても、一族全体が共同の祖先を祭祀することの文化的な範例の価値は変わらない。一方に、村落の範囲を越えてひろがる親族の構成原理があり、他方に、「入り子」式に近親の親族に分化する姿が認められる。二つのベクトルが矛盾しないで親族の実像を構成していると考ええる。

第四章 商家の経営と家族構造

家産の均分相続、親族集団の分化と統合という集団構造が、商家の経営の発展にとっていかなる可能性と限界をもたらしたかを検証した。

商家が繁栄するには、商才に長けた家人を家長のもとに多く抱えることが必要であった。事例はいずれも才覚をもつ家人に家業を分担させて、経営を拡大発展させている。家族の構造がそのまま経営組織に反映するので、大商家になると数世代もの「房」を集めた大家族を構成する可能性が大きくなる。しかし、家族の伝統に従えば、家産の均分は避けられない。とすれば、家産の分割が与える経営への打撃をいかに少なくするかが、大商家の当主がもっとも腐心したことであった。

家産の分割を延期することはできても、結局は兄弟の「房」の間で均分せざるを得ない。しかし、家産の分割という痛手を代償に、野心家の冒険や「敗家子」の放蕩から経営全体の没落を未然に防いだということも少なくなかった。

Ⅲ 宗教と娯楽の集団構造

第五章 民間宗教集団の構造的特性

中国の民間宗教は、教派間・教派内でたえず抗争と分裂を繰り返し、教義も儀式も多様性をもっている。しかし他方では、「教首」の系譜の継承は宗教的権威を象徴し、教派の正統性を保証する。本章の目的は、多様性と統一性とを民間宗教集団の全体的な姿の中に解釈するところにある。

民間宗教の活動には3つの位相があると思われる。「世襲型」「分派型」「自唱型」とよぶことができよう。「世襲型」の存在が、人々が参加したさまざまな教派の存立に正統性を与える。しかし、「世襲型」の現実の姿は、「分派型」がくり返し出現し、その名を僭称することで更新されていく。「分派型」がさらに神格化された宗教的権威をもつことに成功すれば、新たな「世襲型」に発展することもありうる。免災祈福、治病、保祐などのために、師弟の絆を結んで呪術的な力に頼るという活動は、すべての位相に共通した。こうした活動が「自唱型」として広く人々の間に行われていたという事実が、「分派型」や「世襲型」の集団を成長させた背景であろう。3つの位相がそれぞれ乖離と連続を重複するなかに、中国の民間宗教の全体的な姿があったと考える。

第六章 村の宗教活動と担い手

伝統中国の村落社会では、生活の隅々にまで儒教論理が貫徹することが求められたが、それを実行する担い手と宗教的権威とは拡散していたといわれる。本章は、この事実を調査資料の中から検証し、近代華北社会の基本構造を検討した。

調査資料から得られた知見を整理すると、次のようになる。

第一に、村で活動した道士には、立派な廟に住み経を念じることができるものと、他方では普通の人と区別できないものがあった。

第二に、白雲観の下院とみなされた村の道観においても、白雲観の関心は廟地の経営にあり、下院との間に宗教的に結ばれた有機的な共同関係を推測することが困難であった。

第三に、村に住んだ道士は、村が主催する祭祀の主体にはなれなかった。村人の宗教活動に、儀式の体裁と宗教的権威を与えることができたにすぎない。

第四に、村に住む道士は、教派の教義、教典や法統の組織的な継承に縁が薄い存在であった。民俗宗教に取り込まれながら、しかし民俗宗教の主体にもなれない、きわめて曖昧で不明瞭な領域で活動をした。

第五に、村の民俗的な宗教活動は、一般に女性によって担われていた。しかし、宗教集団が組織されていたのではなく、リーダーの個人的な信望が人々を集めたにすぎない。

第六に、村人が日常生活で体験した宗教活動は、きわめて個人的な社会関係のネットワークの中に構成された。道士の間でも、師が異なれば相互の往来はまれであった。

第七章 村の演劇集団の組織と活動

宗族や村落への求心力が弱い華北の村落社会では、演劇の組織や担い手は、香港新界や東南中国と異なっていると予想される。華北村落で演劇が組織される形態と担い手を、調査を実施した北京市房山区元武屯の「銅鑼会」と肖庄の「小車会」の資料から検討した。

村の行事として組織されるものと私的な娯楽団体とみなされるものがあるが、会首を中心に、会首との個人的な関係で集団が構成されるところに組織形態の共通性がある。

村で最も重要な行事は、銅鑼会や小車会の活動とは別のところにあった。廟会で開かれる「吃会」がそれで、村の平和と豊饒とを祈願する祭祀は、村の重立ちが一同に会する機会でもある。社会的な威信は重立ちの存在にあり、「吃会」は村の活動の中心とみなされていた。

これに対し、銅鑼を叩く、喇叭を吹くことは、村の中では高い評価をえていない。「吹鼓手」と呼ばれる彼らの中には零落したものが多く、彼らを語るとき村人は一種の差別を漂わせる。しかし、村落生活のみ出しもの、周辺に生きる人々であっても、「会首」を中心に芝居や演劇の活動を組織すれば、村人の衆目を一身に集めることができた。村の最下層に位置する人々が、彼らの存在を顕現させ、村落生活の中に自らの位置をもつことができたという事実が重要であろう。

彼らの存在は、邑の社会的な威信の秩序とは異質の勢力を体現することになったが、こうした秩序の重層性を可能にしたところに、近代華北社会の構造的な特質の一つを認めることができよう。ある条件のもとで、既存の威信と秩序を圧倒すれば、それにとって代わることもあった。近代史でたびたび登場した民衆運動のダイナミックな性格は、こうした構造の反映でもあろう。

IV 社会の構造と秩序

第八章 社会集団の結社的性格について

福武直、戒能通孝などの先達は、近代華北社会の構造を結社的な性格の中にみていた。しかし、この結論は躊躇いがちにしか表現されていない。本章は、山東義和団運動の頭目として名を馳せた劉士端、曹得礼と村人との関係をとおして、華北村落社会の結社的性格を改めて検討しようとするものである。

魯西南地区は、たび重なる黄河の氾濫に苦しんだ。土地は痩せ、土地の境界をめぐる紛争はたえなかった。力をもたない農民は、頼ってくるものを助けてくれる実力者にすがるしかなかった。勢力家とみなされるものの一つに大地主がいた。教会など外国の権力を後ろ盾にもつものもあった。また、武術の鍛練をつうじて人々の信頼を集めた人物も、勢力家の一人とみなされていた。大地主、教会、武術の頭目は、それぞれの実力を背景に私的な秩序を形成していたと考える。

劉士端は、劉庄の土地のほぼ半分を所有していた。一家を養うに足る土地をもたない多くの村民は、劉士端を頼らざるをえなかった。食べ物が底をついたとき、なにほどこかの施しを彼に期待した。武術が盛んになり彼の名が知られると、劉士端の弟子ということで村々をまわり、武術を教えて糊口をしのごうことができた。

また、彼は広い交際を誇っていた。大刀会の頭目の間ばかりでなく、匪賊の間にも彼の名は知られ、彼を師と仰ぐ師弟関係の網の目が広く形成されていた。劉士端が個人的な結ぶ絆こそ、彼の政治的勢力の背景となっていた。

劉士端を大頭目とした大刀会は、祖師爺を祭祀する祭りを挙行政したが、周囲の村々から千人もの人々が集まったといわれる。劉士端の勢力は、族の神とも村の神とも異なる武術の祖を祀って、一党の凝集を顕現した。しかし、劉士端の大刀会は、彼の個人的な実力にもとづく絆で結ばれただけであり、それ以上の結合に発展した形跡がない。彼の逮捕と処刑の後、急速に瓦解する運命をたどった所以である。

清末の華北社会においても、仁侠的論理で結ばれた広い個人的な絆が勢力の基盤となり、それをもって治める強者による私的秩序をみることができる。

第九章 社会秩序と復讐

本章は義和団運動を素材にして、対立、襲撃、略奪が広範な地域に一挙に蔓延することとなった、当時の中国社会における社会秩序の意識内容をとらえようとするものである。襲撃にまで及ぶ激しい対立を、当時の人々はどのような言葉で観念していたのであろうか。本論では、牧野巽にならって「復讐」という言葉であらわしてみようと思う。

資料の検討から明らかになった点を整理すると、次のようになる。

(一)復讐は、広くしかも多様に解釈された行動基準であったと考えられる。山東省内の至るところで突発した事件は、人々の個別の利害と憤懣にかかわっていた。こうした利害や憤懣を総じて表現する概念があるとすれば、「復讐」がふさわしいのではないか。

(二)復讐は、奪われたものを奪い返す、不正に受けた侮辱を私的な実力でもってはらすという内容を意味する。しかし、恐喝されたり、辱められても、相手が強ければ仕返しを恐れて泣き寝入りをする、という他の一面と裏腹になっている。

(三)復讐の基準は一様なものではない。正確な意味では復讐とならない場合も多い。それにもかかわらず、復讐を果たしたとみなされるのは、復讐の正当性が復讐を果たす側にのみ存在することをあらわしている。

四復讐と社会構造との関連は次のようにいえよう。貧しい人々は、官府に訴えても償われることはなく、親族の力も弱く援助はえられない。多くの記事は、こうした最下層の人々によって事件が引き起こされたことを語っている。彼らが頼ることができたのは、武術の実力と多勢の力にものをいわせて復讐を引き受けてくれる頭目であった。こうした頭目たちが活躍したのは、体制の規範力が希薄な社会においてである。また、一方向性の正当性を特徴とする復讐の観念が広く人々を引きつけたということは、倫理的な価値秩序のルーズな面をあらわしている。

論文審査結果の要旨

本論文は4部9章より構成され、これに「まえがき」と「あとがき」が付されている。

「まえがき」は本論文の序説に相当する部分である。まず本研究が1986年から1990年にかけて、華北地帯の村落社会を対象に日中10名の研究者（社会人類学者と歴史学者）の共同調査に基づくものであり、中国社会の基礎構造と社会変動に関する研究であったこと。具体的な調査領域は、1930年代から解放までの村落の政治と行政、家族と親族、年中行事と民間信仰、武術集団と義和団運動、女性の生活など村の生活の全般に及んだことを述べる。ついで本論文が、特に家族と親族、村落の社会生活、宗教や娯楽の集団、武術集団などの検討から、これらを買いて「分化と統合」というアンビバレントな「構造」を見出したことを述べ、これが中国社会の多様性とダイナミックスを基礎づけていることを示そうとした、と本論分の目的を述べている。

第I部「中国の社会構造と社会変動」は近代中国社会の構造と変動に関するモデルを提示し、第II部「家族と親族の構造」、第III部「宗教と娯楽の集団構造」、第IV部「社会の構造と秩序」ではそのモデルの検証を行っている。

第I部第一章「日本の村と中国の村……比較社会論の試み」は、日本の村との対比において中国の集団構造の特質として、①社会関係が本質的に個人対個人の絆のなかに構成される、②集団は個人的な関係の輻輳したネットワークの中に現れる、③集団の凝集を持続させるのは集団の中心になる人物の実力いかんによる、④集団の構造の中に分節化と統合、対立と連帯という相反するベクトルが同時に内在すると述べている。

同部第二章「現代化と社会変動の論理」は、社会人類学の「構造」の観点で現代中国の社会変動を素描している。論者は、社会生活の秩序あるいは習俗や儀礼などの底流に見出される規範を「構造」と呼び、これは時代をこえて継承され、比較的持続的な性格を持つものであること、従って社会変動を測定する尺度として用いることのできるものだと説く。そしてまず革命以前の中国社会の「構造」について、試論として、特に「家族と親族」、「社会生活」、「秩序と規範」の3つの次元にわけて次の如く述べる。(一)家族と親族の構造 ①父系大家族の理念と均分相続の原理、②分節化(分房の原理)と統合(系譜の原理)、③家族の範囲の多層化。(二)社会生活の構造 ①「差序格局」の社会関係、②社会集団における個の重要性、③社会生活の多元性。(三)秩序と規範の構造 ①正統性は宗孫の系譜の中に必ずしも継承されない、②秩序と規範は私的に結ぶきずなの中に表現される、③形式的規範と実働する秩序の二元性：普遍化された規範と社会的実力による権威。この「構造」の提示のあと論者は、現代中国の農村の変化を実態調査を通じてまとめた3篇の論考(王滬寧1991、陸学芸1992、聶莉莉1992)を詳細に検討し、上述の「構造」の持続と変容について検証している。家族と親族の構造については、均分相続の貫徹、親族集団への期待の高さ、父系大家族の内在的論理の存在、婚姻関係の重要性の増大を述べ、郷鎮企業の経営にしても伝統的な家族経営や親族の合資経営の特徴が引き継がれていると指摘する。社会生活の構造としては「門路」、「拉関係」、「圈子」

といった私的な人間関係が制度の中に持ちこまれ、制度を機能させる機動力となっている。秩序と規範の構造としては、村や家族による各種経営において、有能な人物が重要な役割を果たし、制度と秩序のなかの個人主義的特徴が存続していると述べる。

第Ⅱ部第三章「親族集団の分化と統合」は山東省平原県蘇集郷前楨子李庄及び北京市房山区元武屯における調査を通しての解放以前の親族集団の研究である。ここでは共有地、家廟、家譜を備えた親族集団は稀であり、祖先祭祀は近親の祖先を祭祀する「支」集団に分化し、「入り子」式の構造になる傾向がある。特にエリートを生んだ集団において分節化の傾向は顕著であるが、逆にこれが一族の統合を高めるパラドキシカルな役割を果たしていることを指摘する。

同部第四章「商家の経営と家族構造」は、まず近代中国の商家の家族構造と経営を扱った2篇の論考（林耀華1947、劉煥庭等口述1982）を検討し、ついで論者らの天津市静海県独流鎮での商家に関する調査の結果をつけあわせて検討している。その結果、商家の繁栄には商才に長けた家人達を秀れた家長のもとに多く抱えた大家族が成功しているが、均分相続の原則の故に結局は家産の分割は不可避であること。しかし、秀れた家人の分出が必ずしも家業全体の繁栄をそこなわずに、むしろ経営を発展させる例があり、ここにも親族集団の分化と統合という「構造」がみいだされると説く。

第Ⅲ部第五章「民間宗教集団の構造的特性」においては、民間宗教集団の活動と組織形態の検討を通して、集団構造の特性を明らかにしようとしている。ここでは嘉慶18（1813）年の天理教反乱をとりあげ、参加者らの供述書を資料として分析を行っている。そこで民間宗教は教派間・教派内でたえず抗争と分裂を繰り返し、教義も儀礼も多様性を持つこと。正統性を保証する「世襲型」に対し「分派型」がたえず出現し、その名を僭称することで正当性は更新されていく。活動は免災祈福、治病、保佑などのための呪術的な力に頼り、師弟の絆で仲間が結ばれている点で共通しているという。

同部第六章「村の宗教活動の担い手」は、村の宗教活動の担い手と宗教的権威とが拡散していたことを述べている。前述の山東省平原県蘇集郷前楨子李庄及び北京市房山区紫草塢郷肖庄での調査により、村で活動した道士についてみると、北京の白雲觀と在村の下院とには、宗教上の有機的共通関係が認めがたいこと。道士は村人の宗教活動の儀式の体裁と宗教的権威を与えることはあっても、村の主催する祭祀の主体にはならないこと。村の民俗的宗教活動は実は一般に女性によって担われていたこと。宗教活動は道士の場合も婦人の場合も含め、師弟のような個人的に結ばれた社会関係のネットワークの中で行われていたことが述べられている。

同部第七章「村の演劇集団の組織と活動」では、演劇の組織や担い手の存在形態の分析から村落社会の秩序の重層性を探っている。調査地は前述の北京市房山地区紫草塢郷の元武屯と肖庄である。村の演劇集団は有力者「会首」を中心に個人的関係を通して村内の周縁部に生きる人々をも結集しており、こうした社会的威信の秩序とは異質な勢力の存在は、村落秩序の重層的構造を、具示すると結論する。

第IV部第八章「社会集団の結社的性格」及び第九章「社会秩序と復讐」は、山東省内の義和団運動を素材としており、一括して扱うこととする。山東省内魯西南地区民はたび重なる黄河の氾濫に苦しみ、とりわけ力を持たない農民は実力あるもの（大地主や教会など）に頼ったが、武術の鍛練を通じて人々の信頼を集めた人物もその種の実力者であった。ここでは、武術集団「大刀会」の頭目であり山東義和団運動の頭目として名をあげた劉士端及び曹得礼と村人との関係を、記録資料及び現地調査により検討している。劉についていえば彼は大刀会の頭目であるだけでなく、匪賊の間にも名を知られ、村内外に師弟関係の網の目を広く形成していた。こうして仁侠的倫理で結合した個人的絆の勢力が、当地で強者による私的秩序を形成していたが、その集団も劉の逮捕と処刑後瓦解し、その集団の結社的性格をよく示したという。又論者は、当時山東省内の至るところで対立、襲撃、略奪が展開していたが、大抵は当事者の個別の利害や憤懣のあらわれであり、この行動を「復讐」という言葉であらわしている。貧しい人々に頼られて「復讐」を引き受けたのは、劉や曹の如き武術の頭目とその集団であったことを指摘している。

以上が本論考の要約であるが、華北の農村の基層的「構造」を追求し、それを現地調査資料及び記録の検討を通じて綿密に検証する作業が一貫してなされたといえるであろう。ただこの「構造」概念は論者も暫定的なものとしており、更なる長期にわたる集約的実態調査の累積で洗練させる必要性はあるであろう。ただし、第二次大戦後、内外の研究者の手でこれほど広く華北農村調査が実践されたことはなく、又、本論考の基礎となった聞き取り調査を一問一答の形で資料集（参考資料）として公刊した点も評価することができる。誤植が散見されるのは惜しまれるが、論考全体からみればその価値をそこねるものではない。以上よりして本論考は博士の学位に十分に相当するものと認定される。